

# 住まいと火災

## 火災による被害を防ぐための基礎知識

### (1) 火災件数・死者数と火災原因の推移の概況

東京理科大学総合研究院教授 小林 恭一 博士(工学)

#### はじめに

217号まで「防災規制と火災」というタイトルで、防災と火災に関する基礎知識を4回にわたって連載してきました。そのシリーズは前号で終わりましたが、幸い好評だったようで、本誌編集部から、「防災」から少し離れてもよいので、身近な火災による被害を防ぐことなどをテーマに新たな連載をしていただけないか、と依頼がありました。

日本社会の高齢化が年々進んでいることは日頃実感しているところですが、高齢化が進むと火災により亡くなる高齢者数が増加するのは当然で、今後激増するのではないかと予測する専門家もいます。

このため、国や消防機関では、各種の住宅火災防止対策を推進し、様々な住宅防火キャンペーンやイベントなどを行っています。私たちは、それらの住宅防火対策を実践するだけでなく、さらに一歩踏み込んで、住宅火災についてのちょっとした知識を知っておくと、家庭の火災リスクをずっと減らすことができます。

最近の住宅火災はどのような原因で起こることが多いのか、どんなものにどういう状況で火が着くのか、それを防ぐにはどうすればよいのか、高齢者特有の生活スタイルが火災の発生に大きく関係しているのではないかと、などということを知ることは、火災を起こさないためにとても大切なことです。

そこで、今回から、住宅火災を中心に、近年の火災の件数、死者数、出火原因と着火物の状況などの推移を社会の変化や高齢化を踏まえて分析し、そこから見えてくる、火災による被害を防ぐための基礎知識をお話することにします。

#### 火災は増えているのか減っているのか

新聞には毎日のように、住宅火災で高齢者が亡くなったという記事が出ています。数人の高齢者が一度に亡くなる火災も少なくありません。先日は、京都のアニメスタジオで、放火による悲惨な事件もありました。このような報道を見ると、火災件数や火災による死者数は増えているような気もしますが、統計を見るとそうではありません。

図1は、最近10年間の火災件数と火災による死者数の推移を、消防白書のデータから見たものです。これを見ると、両データとも、2007年から2017年の10年間ほぼ一貫して減少しており、火災件数は1万5千件あまり(約28%)、火災による死者数も550人程度(約27%)減少しています。

何故、火災件数や死者数がこのように急激に減少しているのでしょうか？ それ为本連載の大きなテーマの一つですが、2004年に消防法が改正され、全ての住宅に住宅用火

災警報器の設置が義務づけられたことと大きく関係しています。これについては、後ほど詳しくお話しします。

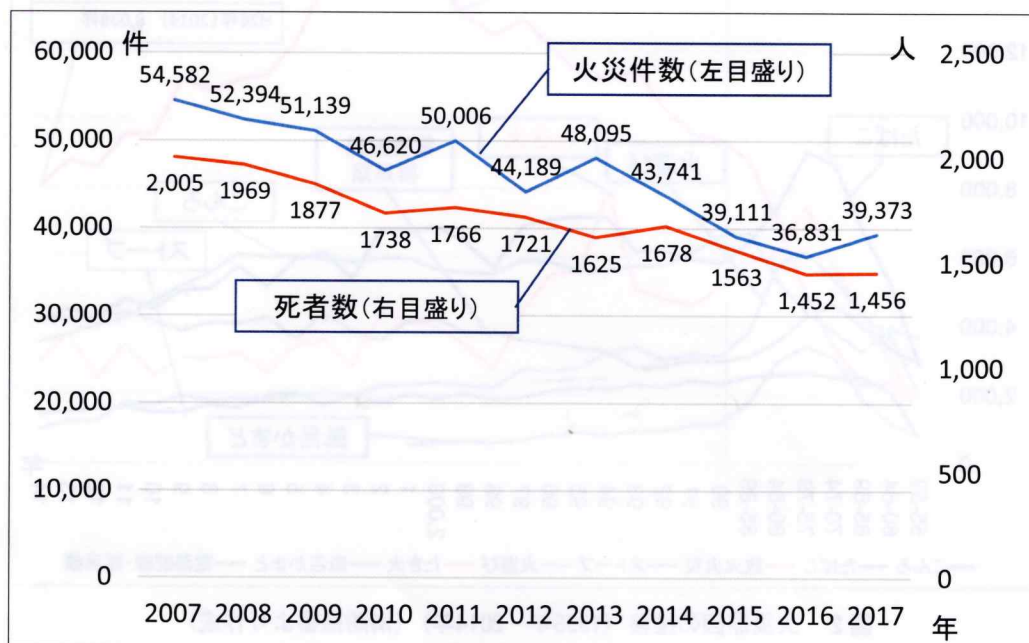


図1 火災件数と火災による死者数の推移（2007～2017）（消防白書より作成）

### 火災原因はどう変化してきたか

図2は、林野火災なども含めた全火災の主な火災原因の推移を、1955年から2014年の60年間で見たものです。昭和の時代（1989年まで）は5年ごとに平均した値で示していますので、少しデフォルメされていることにご注意ください。

これを見ると、次のようなことがわかります。

- ① たばこによる火災は1960年頃から1980年頃まではトップでしたが、1975年前後から減り始め、平成に入ると一時増加に転じますが、1995年から再び減り始め、2002年頃から急減しています。
- ② 放火（放火の疑い、を含む）による火災は、1955年以降急増を続け、1980年頃にトップを奪うと、現在まで圧倒的にトップを続けています。ただし、2002年頃から急減しています。
- ③ こんろ火災は、昭和の時代（1989年頃まで）は急増しますが、平成に入ると横ばいを続けます。他の火災が減る中で一時は2位になったこともありますが、2008年以降急減しています。
- ④ 電気火災は、他の火災が減る中で1994年以降唯一増加傾向にあります。
- ⑤ ストープ火災は長期的に減少傾向にあります。
- ⑥ たき火、火遊び、風呂かまどによる火災も長期的に減少傾向にあります。

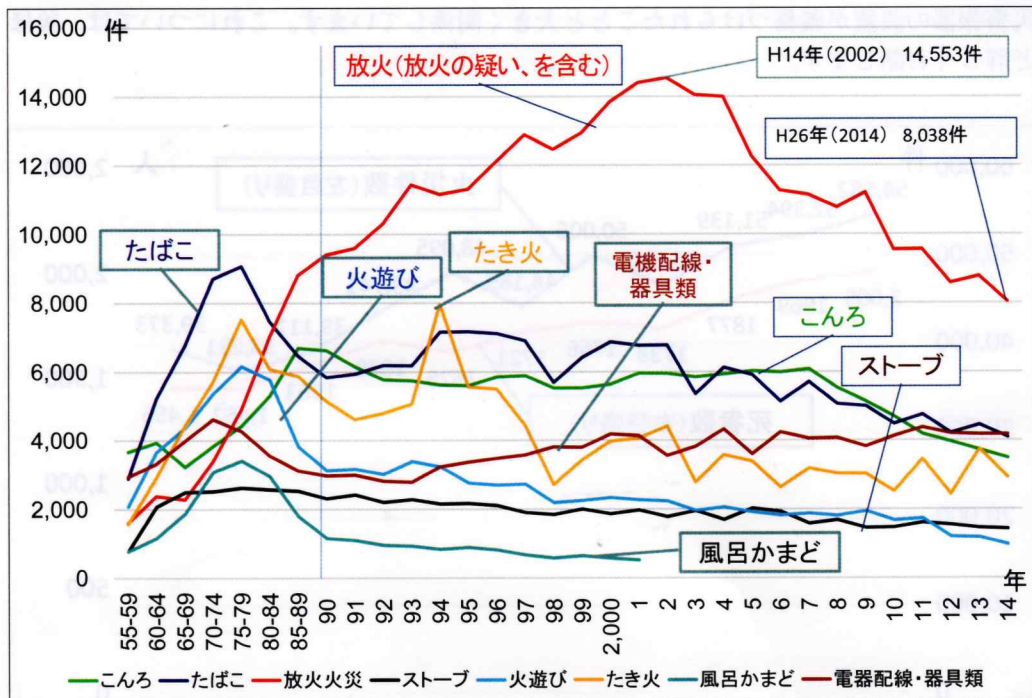


図2 火災原因の推移 (1955年 - 2014年) (消防白書より作成)

火災原因の推移を概観すると以上ようになりますが、これについても、社会の変化と大きく関係していますので、次号以降、住宅火災などを中心に詳しく見ていくことにしたいと思います。